

The background of the entire page is a handwritten musical score on aged, yellowed paper. The score consists of several staves with various musical notations, including notes, rests, and clefs. The handwriting is in dark ink and appears to be a personal or working manuscript. The text is centered over this background.

**大阪モーツァルトアンサンブル**

**第 59 回定期演奏会**

**2014年6月7日(土) 午後2時**

**豊中市立アクア文化ホール**

## 《Programm》

### Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

#### Singspiel „Die Entführung aus dem Serail“ KV 384 (1782)

歌劇「後宮からの誘拐」より 序曲、アリア（第1番）、行進曲（第5番 a）、  
トルコ近衛兵の合唱（第5番 b）、二重唱（第14番）、トルコ近衛兵の合唱（第21番 b）

- I. Ouverture: Presto - Andante - Primo tempo
- II. No. 1 Aria (Belmonte): Andante
- III. No. 5a Marcia
- IV. No. 5b Chor der Janitscharen: Allegro
- V. No. 14 Duetto (Pedrillo & Osmin): Allegro
- VI. No. 21b Chor der Janitscharen: Allegro vivace

#### Kontretanz C-Dur „La Battaille“ KV 535 (1788)

田園舞曲 八長調「戦闘」

Parte I<sup>ma</sup> - Parte II<sup>da</sup> - Parte III<sup>za</sup> - Parte IV<sup>ta</sup> - Marcia turca

#### Sechs deutsche Tänze KV 571 (1789)

6つのドイツ舞曲

…… 休憩 Pause ……

#### Sinfonie Nr. 10 G-Dur KV 74 (1770)

交響曲 第10番 ㄟ長調

- I. *Allegro*
- II. *Andante*
- III. *Allegro*

#### Konzert für Violine und Orchester Nr. 5 A-Dur 2.Fassung KV 219/261 (1775/1776)

ヴァイオリンと管弦楽のための協奏曲 第5番 ㄨ長調 《第二版》

- I. *Allegro aperto*
- II. *Adagio*
- III. RONDEAU: Tempo di Menuetto - *Allegro* - Tempo di Menuetto

#### Sinfonie Nr. 35 D-Dur „Haffner-Sinfonie“ KV 385 (1782)

交響曲 第35番 ㄨ長調「ハフナー交響曲」より 終楽章

- IV. *Presto*

## 野澤 匠 (ヴァイオリン独奏)



1994 年生まれ。4 歳よりヴァイオリンを始める。

2003 年兵庫県主催「佐渡裕とスーパーキッズオーケストラ」オーディションに合格し  
2012 年まで 9 年間在籍。

第 18 回和歌山音楽コンクール第 1 位。

第 8 回若き獅子たちのジュニア音楽コンクール特別賞。

第 9 回万里の長城杯国際音楽コンクール第 1 位。

平成 20 年度ふれあいの祭典ミュージックグランプリフェスティバル in 兵庫出演。

ハバロフスク第 20 回青少年国際芸術フェスティバル出演。

第 28 回摂津音楽祭リトルカメラコンクール奨励賞。

第 6 回長岡京音楽祭 長岡京室内アンサンブル オールモーツァルトプログラムによる  
ニューイヤークンサート出演。

これまでに玉井洋子、折川真理、木田雅子、大谷玲子、玉井菜採の各氏に  
師事。

現在、東京藝術大学 3 年生。

## 大阪モーツァルトアンサンブル

Konzertmeister:	大西 正人				
1. Violine:	大屋 美代子	久保 聡一	佐藤 奈津子	藤井 裕雄	
2. Violine:	濱田 利正	青山 千尋	小谷 健	高橋 淑子	藤井 聡子
Bratschen:	能勢 徹	筒泉 直樹	西村 泰玄		
Violoncelli:		加納 隆	岩田 暢子		
Kontrabaß:	大川 宏明				
Flöten:	宮脇 かおり	門司 真美	松岡 はるひ		
Oboen:	小林 靖之	利谷 久美			
Klarinetten:	柳楽 由美子	向 朱理			
Fagotte:	尾家 祥介	服部 真貴子			
Hörner:	武本 浩	加藤 仁			
Trompeten:	山崎 雅夫	中嶋 香織			
Pauken:	木村 祐				
Schlagzeug:	岡田 芳恵	奥野 祐亮	平瀬 光代	初井 涉	



1984 年、大阪大学大学院生を中心に発足。以後、京阪神の各大学オーケストラ OB を結集し、年間 4~5 回の演奏活動を続けている。指揮者を置かず自発的なアンサンブルの実現を目指す。演奏会では主にモーツァルトの作品を取り上げ、最新の研究成果に基づいて編纂された原典版を使用し、当時の一般的な編成で演奏している。1986 年 6 月に行った特別演奏会では、ヴィーン・フィルのアルフレート・プリント氏、アダルベルト・スコッチ氏等と共演し、好評を博した。1986 年から 1990 年にスベトラ・プロティッチ氏と 4 度共演。1988 年 5 月には、小山亮氏と新モーツァルト全集版によるホルン協奏曲全曲をレコーディングした。1989 年から 1994 年、関西モーツァルト協会例会に 7 度出演。1991 年 12 月 5 日、大阪カテドラル聖マリア大聖堂におけるモーツァルト没後 200 年記念追悼ミサでレクイエムを演奏した。1995 年にはザルツブルク大聖堂でミサに出演、モーツァルト大ホール、ヴィーン・ミノーレン教会で演奏会を行った。1996 年から 2000 年にかけてモーツァルト劇場例会に 5 度出演。1994 年から亀岡混声合唱団と 20 回共演。2004 年、指揮者なしでのモーツァルト交響曲全曲演奏会を完結した。

## 《Einführung》

# モーツァルトの「トルコ風」

大阪モーツァルトアンサンブル 武本 浩

今年 3 月 18 日、モーツァルト劇場で日本語訳によるオペラの上演を通してオペラの普及に尽力された高橋英郎先生が 82 歳で逝去されました。大阪モーツァルトアンサンブルは、モーツァルト劇場例会に 5 度出演し、「フィガロの結婚」、「ハ短調ミサ曲」などを演奏させていただきました。高橋先生から受けたご指導に厚く御礼申し上げますとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

1683 年 7 月 13 日、モーツァルトがウィーンで活躍する 100 年前、オスマン帝国軍は神聖ローマ帝国の首都ウィーンを包囲した。いわゆる第 2 次ウィーン包囲である。オスマン帝国軍には、スルタン（君主）の奴隷（キリスト教徒）で、結婚を禁じられ、厳しい訓練を受けた最強の常備歩兵軍団があった。銃や大砲で武装したイエニチェリである。オーストリア軍は、オスマン帝国軍の激しい攻撃を強固な城壁でしのぎ、駆け付けたポーランド国王ヤン 3 世らの救援により、9 月 12 日、撃退に成功した。この勝利を祝ってオスマン帝国の象徴、三日月をかたどったパン（何故かフランス語の名前がついている）が作られるようになった、オスマン帝国軍が捨てて帰ったコーヒー豆で、ウィーンにカフェができた、ヤン 3 世への感謝の気持ちを表すために、馬具をかたどったリング型のパンが、ウィーンに住むユダヤ人によって作られるようになったなど、さまざまな作り話が生まれた。それだけウィーンの人たちにとって、とってもうれしい出来事だったのである。



1529 年の第 1 次ウィーン包囲以来、西欧に領土拡大を目指している東方のオスマン帝国から、いかに神聖ローマ帝国ならびにハプスブルク家の自領（ハンガリー、クロアチア）を守るかが、神聖ローマ帝国皇帝の極めて重要な仕事であった。対オスマン防衛費を得るために考え出されたのがトルコ税である。民衆に対オスマン防衛の必要性を納得させるために、一つの施策がとられた。それは、スルタンやオスマン軍の行状を恐ろしく描き、民衆の恐怖心を煽り立てるといったものであった。キリスト教徒が男女問わず裸で小突き回されて、売り飛ばされるという屈辱的な絵が広報誌に描かれた。また、幼い子供たちを生きのまま柵の上に串刺しにするオスマン兵の絵も繰り返し描かれた。当時の資料によると、オスマン軍に侵略された土地では、女、子供たちにとっても筆舌につくしがたい残虐行為が行われ、大人の男たちは馬をつなぐ綱につながれて連れて行かれて餓死させられ、老人たちは殴り倒され剣で突き刺された、とある。こうやってドイツの民衆は、政治的にトルコ恐怖 Türkenfurcht を植えつけられたのであった。

さて、本日のテーマはモーツァルトの「トルコ風」である。モーツァルトの「トルコ風」と言えば、第 2 次ウィーン包囲からちょうど 100 年後の 1783 年に作曲された、ピアノソナタ第 11 番イ長調 KV 311 (300i) の第 3 楽章が有名である。「モーツァルトのトルコ行進曲」として親しまれているこの曲には ALLA TURCA（トルコ風）との記載があるが、あくまで「トルコ風」の音楽であり、トルコの音楽ではない。前述した常備歩兵軍団イエニチェリにはメヘテルという軍楽隊が付き

添っていた。メヘテルは絢爛豪華な衣装をまとい、楽器を持って馬やラクダに乗って大音量でオスマン軍の士気を高め、敵を威嚇した。ズルナ（チャルメラ）、ボル（ラッパ）、ズイル（シンバル）、チェヴギャン（錫杖）、ナッカーレ（片手で持つ 2 連式小太鼓）、ダウル（両面大太鼓）、キョス（ティンパニ）の 7 種類の楽器が使われ、キョス以外の 6 つの楽器 1 セットを 1 管編成と称する最大 60 名の編成であった。



トルコの音楽には、マカームと呼ばれる旋法（音階）とウスールと呼ばれるリズム型があり、半音以下の微小音程を含んでいるのが特徴である。また 500

年に及ぶトルコ音楽には楽譜がなく、師匠から弟子に稽古で口頭伝承された。第 2 次ヴィーン包囲で撤退を余儀なくされたオスマン帝国は、その後、次第に勢力を失っていった。1720 年、ポーランドの王はトルコからトルコ式の軍隊や 27 名編成のトルコ軍楽隊を贈物として譲り受け、ロシア、オーストリア、英国など西洋各地にトルコ式の軍隊、軍楽（ヤニチャーレンムジーク Janitscharenmusik、イエニチェリの音楽）が取り込まれていった。また、トルコ音楽のモチーフは西洋音楽にも採用され、管弦楽にもシンバル、大太鼓などのトルコ楽器が使われるようになった。しかし、あくまでも「トルコ風」であり、トルコ音楽の要素を西洋音楽に取り込んだ音楽であった。それは、トルコ楽器を模倣するトライアングルやシンバル、大太鼓の使用のほか、2 拍子系の勇壮なリズム、反復音の頻出、長短調の頻繁な交替、ユニゾンでの和声進行、強弱の突然の転換を特徴とする。イエニチェリの軍楽だけでなく、ロマ（ジプシー）の民族音楽を彷彿させる早いテンポの細やかなリズムや自由奔放な装飾音、跳躍する楽句も多くみられる。

1781 年 8 月 1 日、モーツァルトはザルツブルクに住む父に宛てた手紙に、「一昨日、ゴットリーブ・シュテファニーから、9 月半ばにロシアの大公がヴィーンを訪問する際に上演するオペラを作曲するよう、台本を渡された。」と伝えている。皇帝から直接モーツァルトに作曲依頼があったのではなく、シュテファニーに「何か適当なものはないか。」と皇帝から問われたときに、「モーツァルトが特別なオペラを書いている。」と答えるためであった。ザルツブルクの宮廷を解雇され、ヴィーンで活動を開始したばかりのモーツァルトにとって願ってもない話だった。

この台本は上出来です。主題はトルコ風で、題名は『ベルモントとコンスタンツェ』別名『後宮からの脱出』です。——序曲、第一幕の合唱、それにフィナーレの合唱は、トルコ風の音楽で書くつもりです。（中略）——この台本を作曲するのがとても楽しいので、カヴァリエーリの最初のアリア、アーダムベルガーのアリア、それから第一幕を締める三重唱をもう書きあげてしまいました。

こうして、**ジंकシュピール（歌劇）『後宮からの誘拐』KV 384**の作曲が急ピッチで進められた。8 月 8 日付の父への手紙で、12 時過ぎにトルコ近衛兵の合唱（第 5 番 b）を書き上げ、8 月 22 日付の父への手紙で、第一幕が出来上がったことを知らせている。8 月 29 日付の父への手紙で、「ロシアの大公訪問は 11 月に延期になったので、ゆっくりオペラを書けることになり、うれしい。」と伝える。しかし、9 月 12 日付の父への手紙で、「グルックの『イフィゲーニエ』のドイツ語版と『アルチェステ』が上演されることになったので、俳優たちに 3 つ目のオペラを練習させるのは無理だ。」と伝える。その後、モーツァルトは父に郵便の超過料金を支払わせることになるオペラの膨大な「試食品 Praegusto」をザル

ツブルクに送り、9月26日、第一幕についての考えを伝えている。

序曲については、14小節しかお送りしていませんね。——これはまったく短くて——強弱が絶えず入れ替わるのですが、フォルテのときはいつもトルコ音楽が入っています。——それはつぎつぎに転調していきます。——そして、一晩中眠れなかった人でも、ここで眠るわけにはいかないとしますよ。——

オペラはモノローグで始まっていたのですが、それを小さなアリエット【第1番】にして——さらに、オスミンの短い歌のあとに、二人が一緒におしゃべりをするのではなく、二重唱がくるよう、シュテファニーに頼みました。

トルコの近衛兵の合唱【第5番b】は、これ以上合唱としては望めない、文句なしの出来栄です。——短くて陽気で——まさにヴィーン人向きに書かれています。

第一幕は三週間前に出来上がりました。——第二幕のアリアつと、大酒飲みの二重唱【第14番】（ヴィーン人好みで、要するにわがトルコ風帰宮太鼓にほかなりませんが）、これもすでに出来上がっています。

10月6日付の父への手紙で、作曲は順調に続けているが、「オペラが全部完成したって、どうにもなりません。——どうせグルックの二つのオペラが完成するまで、ぼくのはお蔵入りでしょうから。」としばらく上演の見込みがないことを伝えている。10月23日、ブルク劇場でグルックの『タウリスのイフィゲーニエ』が初演され、11月25日、シェーンブルン宮殿で『アルチェステ』が初演され、やっとモーツァルトにチャンスが回ってきた。1782年5月29日付の父への手紙で、オペラが完成し、リハーサルが開始されることを伝える。

あした、ぼくは美しいコンスタンツェと一緒に、トゥーン伯爵夫人のところで昼食をとにし、そのあと『後宮』の第三幕を夫人のために演奏することになっています。——さしあたって今、ぼくはとても退屈な仕事しかありません。——つまり、校正です。——来週の月曜日に、第一回のリハーサルをする予定です。——正直のところ、このオペラを実に楽しみにしています。——

本日、演奏する曲目は以下の6曲である。ベルモンテのアリアはオーボエで、オスミンのアリアはファゴットで演奏する。

1. 序曲 八長調
2. 第1番 ベルモンテのアリア：スペインの貴族ベルモンテの愛人コンスタンツェと侍女ブロンデが自分の下僕ペドロリとともども海賊にさらわれ、トルコの太守セルムの後宮に幽閉されている。愛人を取り戻すために太守の後宮にやってきたベルモンテが「ここで君に会える、コンスタンツェ！」と歌う。  
(後宮の番人オスミンがやってきてベルモンテを追い払い、「まずは首切り、それから吊るし、そのうえ真っ赤に焼けた棒で串刺しだ、それから焼いて、縛りつけ、水にひたして、最後に皮を剥ぐ。」とキリスト教徒に対する憤怒を歌う。ベルモンテはペドロリと再会し、逃走の計画を練る。)
3. 行進曲第5番a：そこに太守がコンスタンツェを伴って遊宴船で帰還したことを知らせる行進曲が流れる。  
(ベルリンのプロイセン文化財団国立図書館に保管されている総譜（ヴィーンで写譜された極めて初期の版）のみに現れるこの行進曲は、後述するように、写譜屋がその自筆譜を紛失してしまったらしい。そのため、1980年に発見されるまで、この行進曲は知られていなかった。9つの管楽器とドイツ太鼓とトルコ太鼓が使用されているが、トルコ音楽に特徴的なズルナを連想させるオーボエやシンバルなどの打楽器は使用されていない。)

4. 合唱第 5 番 b：トルコ近衛兵による歓呼の合唱が沸き起こる。
5. 第 14 番 ペドリロとオスミンのデュエット：ペドリロは、オスミンを酔わせることに成功、共に「バックス万歳」と歌う。  
 （ペドリロは、酔っ払ったオスミンをベッドに運び、ベルモンテはコンスタンツェと再会できる。4 人は真夜中に逃亡を企てるが、衛兵につかまり、しらふに戻ったオスミンの前に引き立てられていく。オスミンは、「ははは、勝ちどきをあげたいね、お前たちが刑場にひかれていく時、そして首をしめられる時！」と歌う（第 19 番）。そこに太守が現れ、ベルモンテがかつて自分の許嫁を奪った宿敵の息子だと知る。ベルモンテは極刑を覚悟するが、太守はこれを許し、両カプルは出発する。
6. 第 21 番 b：トルコ近衛兵は、慈悲深い寛大な太守に万歳を歓呼して幕を閉じる。

このオペラには、モーツァルトの他の楽曲にはめったに使われない特殊な楽器が登場する。Triangoli（トライアングル）、Piatti（シンバル）、Tamburo grande（大太鼓）と G 管の Flauto piccolo（フラウトピッコロ）である。Tamburo grande のパートに記載された音符には、玉の上下に棒が出ていることから、現在使われている大太鼓（バスドラム）とは異なる楽器であることが分かる。モーツァルトが指定した大太鼓は、トルコではダウルと呼ばれる両面太鼓である。肩から太鼓を吊るし、右手で先端にこぶのある太いスティック、左手で細いスティックを持って太鼓の両面を叩き分ける。ブルガリアで広く使われている大太鼓タパンはダウルを起源とする。

ポストホルンセレーナーやドイツ舞曲で使用される Flautino（フラウティーノ）はソプラニーノリコーダーで演奏されるが、フラウトピッコロはどのような楽器であったのだろうか。通常の C 管フルートより少し短いソプラノフルートなのか、フラウティーノと同じくソプラニーノリコーダーなのか、議論の余地がある。モーツァルトが記譜した G 管フラウトピッコロの音域を調べてみると、序曲は f1-f3、第 3 番は a1-a2、第 5 番 b は g1-f3、第 14 番は c1-g2、第 19 番は g1-d3、第 21 番 b は f1-f3 と、実に c1 から f3（実音では g1 から c4）の 2 オクターブ半に及ぶ。この音域をソプラニーノリコーダーで演奏するのは少々無理があるので、3 オクターブの音域を持つソプラノフルートが使用されたのではないだろうか。今回は、残念ながらこの特殊なフルートを入手することができなかったため、C 管フルートの半分の長さの C 管ピッコロで代用することにした。ピッコロの音域は d2 から c5 で低い音域をカバーできないため、モーツァルトの記譜通りに演奏することができないことをお断りしておく。



1782 年 7 月 16 日、『後宮からの誘拐』KV 384 がブルク劇場で初演された。7 月 20 日、ザルツブルクに住む父に宛てた手紙に第 1 回目の公演は大好評だったが、19 日に行われた二回目の公演は、陰謀があり、野次られ通してあったことが述べられている。この手紙に、総譜を同封している。

ここに原譜と台本 2 部を同封します。――

ご覧のようにたくさんの削除があります。それは、当地では楽譜はすぐに写されてしまうのを知っていたからで、――ぼくはまず自分の楽想を自由に思いめぐらせておいて――最後に写譜屋に渡す前にあちこち変更や削除を加えました。――

—そこで、ご覧のとおり譜面で上演されました。—あちこちで、トランペット、ティンパニ、フルート、クラリネット、トルコ音楽が抜けています。—というのは、それだけ線の入った五線紙が手に入らなかったからで—これらのパートは別紙に書いたのです。—おそらく写譜屋がなくしたらしく、それは見つかりませんでした。

モーツァルトがヴィーンで使用していた五線紙は 12 段のものであったため、全ての楽器を書ききれなかった。モーツァルトの証言は、行進曲第 5 番 b 以外にも現在使用されている総譜には、別紙に書いたトランペット、ティンパニ、フルート、クラリネットなどのパートが欠落している可能性を示している。例えば、このオペラのクライマックスを飾る終曲のトルコ近衛兵の合唱（第 21 番 b）は、フルートとクラリネットが使われていない。写譜屋が紛失したままになっているのではないだろうか。本日の演奏では、これらのパートはもともとモーツァルトが別紙に作曲していたと仮定して復元することにした。

父レーオポルトは、7 月 29 日に予定されているザルツブルクのジークムント・ハフナー（1756-87）の貴族爵位授与記念の祝賀会のためにシンフォニーを作曲するよう息子に依頼していた。モーツァルトは父の願いをかなえるために大急ぎでこの仕事に着手したが、楽譜が送れたのは、8 月 7 日。父の反対を押し切って聖シュテファン大聖堂でコンスタンツェと結婚式を挙げた 3 日後のことだった。

短い行進曲を同封します。—すべてがうまく間に合い—あなたの好みに合うといいのですが。—第一楽章のアレグロは、すごく情熱的に—終楽章は—できるだけ速く演奏されなくてははいけません。—ぼくのオペラは、きのうまた（それもグルックの希望によって）上演されました。—グルックはぼくを大いにほめてくれました。あす、グルックのところで昼食をします。

こうして完成した交響曲第 35 番『ハフナー交響曲』二長調 KV385 は、トルコ風行進曲の第 1 楽章で始まり、終楽章の第一主題は、『後宮からの誘拐』KV 384 の第 19 番オスマーンの aria「ははは、勝ちどきをあげたいね、お前たちが刑場にひかれていく時、そして首をしめられる時！」から採られている。再現部の直前ではトルコ風の装飾音符が連続して現れる。

1787 年 12 月 7 日、モーツァルトに、12 月 1 日より皇王室宮廷音楽家として年棒 800 グルデンが支給されることが決定した。年棒 2000 グルデンでその地位にあったグルックが、11 月 15 日にこの世を去ったからである。宮廷音楽家としての責務は、毎年、宮廷大舞踏会場と宮廷小舞踏会場で行われる仮面舞踏会で使用する舞曲（メヌエット、ドイツ舞曲、田園舞曲）を作曲することだけであった。田園舞曲『戦闘』KV 535 は、1788 年 1 月 23 日に作曲された。自筆譜には La Bataille とフランス語で、『自作全作品目録』には、die Batallie とドイツ語で表記されている。曲の最後に弓の毛ではなく棒の部分で弦を叩くコル・レーニョ奏法を伴うトルコ行進曲がついている。3 月 19 日付のヴィーン新聞には、ドイツ語軍歌『われは皇帝たらんもの』と『ベオグラードの攻囲』のパート譜、ならびにクラヴィア版筆写譜の広告が掲載されている。この筆写譜はラウッシュから販売された。アルターリアから出版されたクラヴィア版印刷譜の広告でも『ベオグラードの攻囲』と謳われている。神聖ローマ帝国のプリンツ・オイゲンがベオグラードでオスマン帝国軍を破ったのが 1717 年 8 月 17 日。この勝利を記念して田園舞曲『戦闘』は作曲された。1787 年に始まった露土戦争に同盟国のロシアと共にオスマン帝国と戦っていたため、国民を鼓舞するために作曲されたと考えられている。この戦いは 1791 年まで続いた。3 月 5 日に作曲されたドイツ語軍歌イ長調『われは皇帝たらんもの』KV 539 の歌詞は次の通りである。

僕は皇帝になりたい、皇帝になりたい！オリエントを震撼させてやるんだ、トルコは震える、コンスタンティノープルは僕



のもの、コンスタンティノープルは僕のもの、コンスタンティノープルは僕のもの！けれど今はヨーゼフがぼくの願いを命がけで叶えようとしている。だから彼の治世は永遠であれ！

1789年2月21日、**6つのドイツ舞曲 KV 571**が作曲される。第1曲二長調の舞曲に始まり、第2曲イ長調、第3曲八長調、第4曲ト長調、第5曲変ロ長調と続き、第6曲二長調の舞曲で締めくくられる。第6曲の二短調のトリオからトルコ風の音楽になっている。最後は二長調にもどり、オスマン帝国の繁栄と滅亡を暗示する。

1777年9月23日の朝、モーツァルトは職を求めて母と共にパリに旅立った。9月25日と10月9日に書かれた父からアウグスブルクに滞在しているモーツァルトに宛てた手紙に、**ヴァイオリンと管弦楽のための協奏曲第5番イ長調 KV219**のために新たに作曲された第2楽章アダージョのことが触れられている。

ところで鯉（かます）色の灰色のズボンを置いていってしまったね。もしほかに機会がなければ、このズボンは、『アントレター音楽』、いくつかの『コントルダンス』、ブルネッティのために作られた『アダージョとロンドー』、それにまだほかに私の手に入るものがあればそれと一緒に配達夫に渡そう。

管楽器用の宮廷音楽の楽譜がまだそっくりあり、それにブルネッティ用のアダージョの楽譜もあります。この一曲は彼にはすこし技巧的すぎたからです。たぶん、これは私が小さな五線紙に書いて、少しずつ送りましょう。

この手紙に出てくるアントーニョ・ブルネッティ（1744頃-1786）は、ザルツブルク宮廷楽団のコンツェルトマイスターで、アダージョはブルネッティがヴァイオリン協奏曲第5番を演奏するために新たに作曲したものである。この手紙で父は何を言っているのだろうか。モーツァルトがブルネッティのために新たに書いたアダージョは父レーオポルトが持っている。その理由はブルネッティには少し技巧的過ぎたからである。これはこの協奏曲のソリストを務めたブルネッティの技量からすると不可解な表現である。ブルネッティは新作のアダージョが気に入らなかったで、モーツァルトに楽譜を突き返したのだとすると、父親の子に対する愛情がこのような表現をさせたのかもしれない。逸品のアダージョをこのままお蔵入りさせるのはもったいないのでパリに旅立ったモーツァルトがヨーロッパ各地での演奏活動でレパートリーの一つにできるよう、写譜して送ってあげよう、と言うことなのだろう。オリジナルのアダージョを含め協奏曲の楽譜がブルネッティの手元にあるとしたら、モーツァルトが作曲した5曲のヴァイオリン協奏曲は、ブルネッティのために作曲されたということになるのだろうか。モーツァルトは、「ヴァイオリン教程」の著者としてヨーロッパ中に名が知られていた父親からヴァイオリンの手ほどきを受け、1769年11月27日、13歳でザルツブルク宮廷楽団の無給のコンツェルトマイスターに就任した。1772年8月21日になって年棒150グルデンの給料が16歳のモーツァルトに支払われることになった。彼がヴァイオリン協奏曲を作曲した時期は、1773年から1775年に集中している。1773年4月14日作曲の第1番変ロ長調 KV 207に始まり、1774年5月31日には2つのヴァイオリンのためのコンチェルトーネ 八長調 KV 190 (186E)、第2番二長調 KV 211（1775年6月14日）、第3番ト長調 KV 216（1775年9月12日）、第4番二長調 KV 218（1775年10月）と続き、1775年12月20日に第5番イ長調 KV219が作曲された。その後、1776年にブルネッティのためにアダージョホ長調 KV261とロンド変ロ長調 KV269 (261a)が、それぞれ、第5番の第2楽章、第1番の第3楽章の代替楽章として作曲された。ブルネッティが、ザルツブルク宮廷楽団首席ヴァイオリン奏者となったのは、1776年だったので、それ以前に作曲された一連のヴァイオリン協奏曲は、モーツァルト自身が演奏するために作曲されたと思われるのが自然である。

独奏ヴァイオリンを含む管弦楽曲を作曲したのは、これらのヴァイオリン協奏曲が始めてではなかった。ザルツブルク大

学の修了式や個人的な祝賀会で演奏される、複数楽章からなるカッサシオンやフィナーلمジーク（修了式の音楽）、セレナーデにヴァイオリンを独奏とした協奏曲風楽章を数多く作曲しているのだ。これらの協奏曲風楽章が作曲された時期もまた、モーツァルトがザルツブルク宮廷楽団でコンツェルトマイスターとして活躍していた時期と重なっている。当時の協奏曲は、バロック時代の合奏協奏曲に見られるスタイルを継承していた。モーツァルトは、バロック時代の Ripieno と Concertino のように、総譜に Tutti（合奏部）と Solo（独奏部）をきちんと明示し、独奏と伴奏という関係ではなく、独奏者を全体の中で主席を占める者として位置付けた。すなわち、Tutti では独奏者も第 1 ヴァイオリンのメンバーとして演奏し、Solo では、弦楽器は第 1 プルト奏者のみに縮小し、チェロとコントラバスも 1 名ずつで演奏したのである。このように演奏することでモーツァルトが意図した音楽が明確に浮かび上がってくる。オーケストラに管楽器が含まれる場合は、通奏低音にファゴットが追加された。

ヴァイオリン協奏曲第 5 番イ長調 KV219 は「トルコ風」として知られているが、「トルコ風」はモーツァルトの命名ではない。第 3 楽章は、優雅なメヌエットで始まるが、突然、ロマの要素が強いトルコ風の音楽に変わる。第 165 小節から始まる低弦のホルン・レーニョに乗って跳躍するヴァイオリンのテーマは、モーツァルトが歌劇『ルチオ・シッラ』KV 135 のために 1772 年に作曲したバレエ音楽『後宮の嫉妬』KV Anh109 (135a)の第 8 番、第 32 番フィナーレとまったく同じである。『後宮の嫉妬』は、複数の作曲者による作品や民族音楽の素材を集めたスケッチであることから、このテーマは、モーツァルトのオリジナルではなく、民族音楽の素材か、他の作曲家からのコピペであることがわかる。モーツァルトもコピペを繰り返して自分のアイデンティティを確立していったのである。



1770 年 4 月、ローマで作曲した**交響曲第 10 番ト長調 KV 74** は、イタリア序曲の様式。自筆譜に速度表示はないが、第 1 楽章の 16 分音符の動きがそのまま半分の速度になって第 2 楽章に引き継がれる。第 1 楽章の第 17 小節から第 22 小節と第 77 小節から第 82 小節ではシンシアグレア（シジュウカラ）の声が聞こえ、第 3 楽章の第 49 小節からの短調部でトルコ風の音楽が聞こえる。

(2014 年 5 月 27 日)

## 次回予告

### 創立 30 周年記念 第 60 回定期演奏会

12 月 21 日（日）午後 3 時開演

豊中市立アクア文化ホール

フリーメイソンの葬送音楽 八短調 K.477 (479a)

英雄劇「エジプト王ターモス」のための 2 つの合唱と 5 つの幕間音楽 KV 345 (336a)

歌劇「魔笛」KV 620 ハイライト

## 【参考文献】

1. Gerhard Croll: Wolfgang Amadeus Mozart, Marsh der Janitscharen für 9 Bläser und 2 Trommeln KV deest aus „Die Entführung aus dem Serail“ KV 384, Bärenreiter Verlag (1980)
2. Gerhard Croll: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie II: Bühnenwerke, Werkgruppe 5, Band 12: „Die Entführung aus dem Serail“ KV 384, Bärenreiter Verlag (1982)
3. Christoph-Hellmut Mahling: Wolfgang Amadeus Mozart, Sinfonie in D „Haffner-Sinfonie“ KV 385, Bärenreiter Verlag (1970)
4. Neal Zaslaw: Mozart's Symphonies – Context, Performance Practice, Reception, Clarendon Press Oxford (1989)
5. Marius Flothuis: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie IV: Orchesterwerke, Werkgruppe 13: Tänze und Märsche, Abteilung 1: Tänze Band 2, Bärenreiter Verlag (1988)
6. Christoph-Hellmut Mahling: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie V: Konzerte, Werkgruppe 14: Konzerte für ein oder mehrere Streich-, Blas- und Zupfinstrumente und Orchester, Band 1: Violinkonzerte und einzelsätze, Bärenreiter Verlag (1983)
7. Gerhard Allroggen: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie IV: Orchesterwerke, Werkgruppe 11: Sinfonien, Band 2, Bärenreiter Verlag (1985)
8. 河野淳：ハプスブルクとオスマン帝国, 講談社 (2010)
9. ジェム・ベバール 著, 新井政美 訳：トルコ音楽にみる伝統と近代, 東海大学出版会 (1994)
10. 伊東信宏：中東欧音楽の回路 ロマ・クレズマー・20世紀の前衛, 岩波書店 (2009)
11. 濱崎友絵：オスマン帝国と軍楽隊, 早稲田大学オープン教育センター模擬講義 (2013)  
[http://cnt.waseda.jp/ncontents/open/taiken/mogi13/13\\_12\\_hamazaki\\_01/start.html](http://cnt.waseda.jp/ncontents/open/taiken/mogi13/13_12_hamazaki_01/start.html)
12. アッティラ・チャンパイ, ディートマル・ホラント 編, 海老沢敏, 畔上司 訳：モーツァルト, 後宮からの誘拐, 音楽之友社 (1988)
13. 野口秀夫：モーツァルトにおけるトルコ音楽 ヴァイオリン協奏曲 イ長調 K.219フィナーレ中間部を主に, 神戸モーツァルト研究会第217回例会 (2011) <http://www.hi-net.zaq.ne.jp/buasg502/217.pdf>
14. スタンリー・セイディ編, 中矢一義・土田英三郎 日本語版監修：新グローヴオペラ事典, 白水社 (2006)
15. オットー・エーリヒ・ドイチュ, ヨーゼフ・ハインツ・アイブル 編, 井本响二 訳：ドキュメンタリー モーツァルトの生涯, シンフォニア (1989)
16. 海老沢敏, 高橋英郎：モーツァルト書簡全集III, 白水社 (1988)
17. 海老沢敏, 高橋英郎：モーツァルト書簡全集V, 白水社 (1995)
18. 海老沢敏, 高橋英郎：モーツァルト書簡全集VI, 白水社 (2001)